牧会学へのフェミニスト・アプローチから学ぶ

才　藤　千津子

はじめに

日本の教会において，教会で起こる性差別やハラスメントの問題が公に議論されるようになって久しい。教会はそのような差別やハラスメントが起こらない場所ではなく，むしろ宗教者の持つ宣教の「力」（パワー）の大きさから，力の濫用・誤用による人間関係の破壊の危険性が大きい場所でもある[1]。そして，被害者の支援に携わる人々からは，牧師はそのような問題の当事者となることを自ら予防し，問題が起きた場合には適切な支援者となる必要があることがたびたび指摘されている[2]。

また，昨年春以来のコロナ危機の中で，国内の自殺者数，特に女性の自殺者数が大きく増加している。東京都健康長寿センターなどのチームによる調査では，昨年７月から10月までの「第２波」における国内の自殺者数は，前年比で16％増，とくに女性は37％増で男性の５倍である[3]。その原因として，

1　ハラスメント防止テキスト作成プロジェクトチーム編『ハラスメント防止テキスト　教会と暴力Ⅰ』日本バプテスト連盟宣教研究所・日本バプテスト女性連合，2011 年，8－11。ハラスメントの意味，牧師の持つ「力」の源泉とは何か，牧師の持つべき「力」と持ってはならない「力」などについての説明は，この小冊子にまとめられている。

2　例えば，同上，1 頁。

3　T. Tanaka, S. Okamoto, “Increase in Suicide Following an Initial Decline during the COVID-19 Pandemic in Japan,” *Nature Human Behaviour*. (2021). https://www.nature.com/articles/s41562-020-01042-z.

家族が家庭で過ごす時間が増え，家庭不和や子育て負担の増加によって女性への負担が増えていることなどがあるのではないかと言われている。他にも，女性に多い非正規雇用者の失業が大幅に増えたこと，特にシングルマザーの経済的困窮が目立つこと，医療や保健，介護など，女性の多い職場で働くいわゆるエッセンシャルワーカーと言われる人たちが長期化するコロナ危機の中で疲労困憊していることなどが報道されている。

筆者は，以上のような女性をめぐる様々な問題に取り組み，教会の人間関係で起こるハラスメントを予防する際に一つの重要な視点を提供してくれるのが，1990年代にフェミニスト神学の影響を受けて現れた牧会学へのフェミニスト・アプローチだと考える。

フェミニスト神学とは，言うまでもなく，1960年代の後半から1970年代にかけて北米を始めとして各地に急激に広がったキリスト教と神学における女性解放の試みである。また，牧会学へのフェミニスト・アプローチは，このフェミニスト神学の影響を受けて，1990年代から北米を中心として発展した牧会学における一つの立場である[4]。牧会学へのフェミニスト・アプローチとは，牧会学において，キリスト教信仰の立場に立つ女性たちが牧会者として教会の中に留まりながら，教会の内外における家父長制と性差別の構造を批判的に分析し，女性が自らの主体性を取り戻し，差別や抑圧，不公正に抵抗するための理論と方法を提示するものである。このアプローチでは，聖書の物語や様々な宗教シンボルは，家父長制の影響を受けているにもかかわらず，女性を力づけてゆくために欠くことが出来ない信仰の源泉だとされる[5]。

フェミニズムが究極的にはすべての人間の解放を目指しているように，牧

4　このような立場全てに対して，必ずしも「フェミニスト・アプローチ」という言葉が使われるわけではない。「フェミニスト・パラダイム」とか「フェミニスト牧会学（Feminist Pastoral Theology）」という言葉が使われることが多い。それらを総称して，この論文では暫定的に「牧会学へのフェミニスト・アプローチ」または「フェミニスト牧会学」という用語を用いる。

5　Bonnie J. Miller-McLemore, “Feminist Theory in Pastoral Theology,” in Bonnie J. Miller-McLemore & Brita Gill-Austern (eds.), *Feminist & Womanist Pastoral Theology* (Nashville, TN: Abingdon Press, 1999), p. 85.

会学へのフェミニスト・アプローチも，単に性差別だけではなく，社会階層，人種，民族，性的指向などすべての観点から見て，社会から疎外され，痛みと共に沈黙させられてきた人々が声を上げることを支援する。現在では，フェミニズムの影響を抜きにして昨今の牧会学を論じることはできない。

この小論では，牧会学へのフェミニスト・アプローチについて，Ⅰ．その背景，Ⅱ．先駆的著作のうち1990年代から2000年代前半にかけての初期の作品のうち英語で出版されたものの中からいくつかを紹介する。そののち，Ⅲ．牧会学へのフェミニスト・アプローチの特徴の中から，教会でのハラスメント防止のために参考にできると思われる事柄を示したい。

Ⅰ　牧会学へのフェミニスト・アプローチが出てきた背景

北米の牧会学の分野でフェミニスト・アプローチをとる著作が出版されるようになったのは，聖書学や組織神学など他の神学諸分野に比べてひと世代遅れ，1990年代頃からである。初期には，フェミニストとしての立場を直接明示しないでフェミニスト牧会学の理論や方法を示した著作もあった[6]。その理由としては，牧会の現場である教会が伝統に対して保守的な傾向があったこと，北米の牧会神学自体が学問として未だ成熟の過程にあったこと，特に女性の経験を問題にしなくても，社会的マイノリティの問題はすでに実践神学で取り上げられてきたとされたことなどがあげられる[7]。

そして最後の理由として，初期のフェミニスト牧会学研究がヨーロッパ系アメリカ人女性の視点中心であり，アフリカ系アメリカ人女性などアメリカ社会におけるマイノリティ女性の問題の取り上げ方について，曖昧さと限界があったことが指摘されている[8]。1980年代以降，アフリカ系アメリカ人女性たちのなかから，フェミニズム運動の中産階級・ヨーロッパ系アメリカ人女

6　例えば，Maxine Glaz and Jeanne Stevenson Moessner, *Women in Travail and Transition: A New Pastoral Care* (Minneapolis, MN: Augsburg Fortress, 1991).

7　Miller-McLemore, “Feminist Theory in Pastoral Theology,” pp. 86-87.

8　Ibid.

性中心のあり方への問題が提起された。フェミニズム運動は「女性の経験」と「女性の連帯」を強調してきたが，奴隷制度のもと白人たちから抑圧されてきたアフリカ系アメリカ人女性たちは，長年自分たちを差別してきた女性たちが，自分たちの経験を一般化して「抑圧された女性の経験」とみなすことに我慢がならなかった。「女性」という集団は，差別を受けた側から見た場合，決して一枚岩ではない。女性の経験を一般化，抽象化することはできない。人種や民族，社会的階層，性的指向などさまざまな要因によって多様な経験が存在しているのである。アフリカ系アメリカ人女性たちは，人種差別と性差別は一体であり，ヨーロッパ系アメリカ人女性中心のフェミニズム運動は人種差別をはらんでいると指摘した。

たとえば，1980年代，アフリカ系アメリカ人女性作家アリス・ウオーカーは，いわゆる白人男性からのレイプやリンチなど人種差別の暗部を含めたアフリカ系アメリカ人の生活の真実を描いた小説『カラー・パープル』(1982)を発表してピューリッツア賞を受賞し，現代アメリカを代表する作家のひとりになったが，この作品は，スピルバーグ監督によって映画化され，大きな反響を呼び起こした。ウオーカーは，白人社会の人種差別や偏見と闘い，男性中心社会の不正と不条理に抵抗する姿勢を明確にし，「フェミニスト」に対抗して自らを「ウーマニスト」と宣言した[9]。

このことへの反省から，北米のフェニミスト牧会学の著作のタイトルは，「フェミニスト・ウーマニスト牧会学」という形で，ウーマニスト牧会学と併記されることが多い[10]。ウーマニスト牧会学とは，性差別と人種差別という二重の社会的抑圧の下にあるアフリカ系アメリカ人女性の経験を理解し解放を支援するために，人種，階級，ジェンダーが交差する様相を分析する牧会学の一つの潮流である。

9　アリス・ウォーカー『母の庭をさがして』(アメリカ・コラムニスト全集－アリス・ウォーカー集）原このみ訳（東京書籍，1992 年）

10　例えば，Bonnie J. Miller-McLemore& Brita Gill-Austern, eds., *Feminist & Womanist Pastoral Theology,* (Nashville, TN: Abingdon Press, 1999).

Ⅱ　牧会学へのフェミニスト・アプローチの先駆的著作から

既に述べたように，1990年代ごろから，フェミニスト神学の立場に立つ牧会学者たちは，牧会者としてまた牧会を受ける者としての女性の体験に基づいて，人間の心理的発達とパストラルケアの実践について，伝統的な男性優位のアプローチに対してチャレンジした。聖書と対話することを信仰の糧にし，教会の中にとどまりながら，女性の問題にどう取り組んで行ったら良いかと苦闘した女性の牧師たち，女性の神学者たちが大勢いたのである。筆者も1990年代の後半にアメリカのボストンの神学校に留学し，そこで行われていた女性のためのパストラルケアの授業に参加したが，教室はボストン中から集まった女性たちでいつも満杯であった。そこでは，女性への暴力や性的虐待などの具体的な問題が，熱を込めて，時には涙ながらに話し合われることに衝撃を受けたのを覚えている。今から思えば，教師は，フェミニズムの視点に立つ教授法を用い，牧会的観点も入れながら，困難の中にある女性たちの声を引き出そうと努力していたのだと思う[11]。

牧会学，牧会心理学の領域でフェミニスト・モデルを採用したことを明示したものの中で先駆的な著作の一つは，1993年に出版されたスウェーデンの牧会心理学者 V. M. デマリニス（V. M. DeMarinis）『*Critical Caring: A Feminist Model for Pastoral Psychology*』である。この著作においてデマリニスは，牧会学とフェミニスト神学の聖書解釈，そして宗教心理学を対話させる牧会心理学のモデルを提示し，女性がライフサイクルの中で出会うさまざまな出来事に対する牧会のあり方を論じた。

クリティカル（critical　批判的な，批評的な）という英語は，ある人や意見について注意深く評価し，重要な介入をするときに使われる。一方で，ケア（care）という英語は，ある人や事柄に適切な関心を示すことを意味する。牧会においては，苦しんでいる人への共感的なケアや導きが必要なことは言うまでもないが，同時に，牧会現場で起こっていることの中に，人権を抑圧し，

11　Brita Gill-Austern, “Pedagogy Under the Influence of Feminism and Womanism,” in eds. Bonnie J. Miller-McLemore & Brita Gill-Austern, *Feminist & Womanist Pastoral Theology*, pp. 149-168.

弱い立場に置かれた者を苦しめる構造がないかについて批判的に見ていかなければならない。牧会者は，ケアという行為を理想化するのではなく，ケア関係の中に起こって来るハラスメントや差別など権力の構造を分析する思考力を身につける必要があると言える。

以上のような考え方に立つデマリニスは，フェミニスト神学の立場に立つ牧会実践において，牧会者は「注意深い評価（批判的に見る）」と「適切な関心（共感的によく聴く）」の両方のバランスをとることが重要だと説く[12]。彼女は，フェミニスト神学を基盤とした「批判的ケアリング（critical caring）」という新しいパストラルケアのモデルを示したのである。一見両立しないように思われる二つの言葉を対話させ，「クリティカル・ケアリング」という独自の牧会学モデルを提示したところに，デマリニスの意義がある。

Ⅲ　牧会学へのフェミニスト・アプローチの特徴

この章では，1990年代以降2000年代の半ばまでに北米で出版された文献を参照しながら，牧会学へのフェミニスト・アプローチの初期の著作の主な特徴を紹介したい。なお，近年急速に発展したジェンダー研究の成果を援用して牧会学の著作が書かれることも多く，その場合には必ずしもフェミニズムという言葉は使われていない。本小論で紹介する著作の中には，その中で筆者がフェミニスト・アプローチをとっていると判断したものも含まれる。

(1) キリスト教の伝統の批判的継承－聖書の再解釈，教会共同体の重要性

牧会学へのフェミニスト・アプローチは，自らを，聖書，教派的伝統に基づく神学，礼拝，教会，キリスト教のシンボルなど，キリスト教信仰とその伝統のもとに位置づける。牧会は，キリスト教共同体における，そしてキリスト教共同体への業として意味づけられる。その際，現代のフェミニスト神学の成果から学び，例えば，聖書の女性たちの描かれ方や伝統的な信仰のあり方の再解釈を行う。

12　Valerie M. Demarinis, *Critical Caring: A Feminist Model for Pastoral Psychology* (Louisville, KY: Westminster/John Knox Press, 1993), pp.15-17.

(2) 女性の人生を女性の立場から理解するための学際的・自伝的アプローチ

牧会学者ガーキンは，現代の牧師に求められている牧会における能力を二つあげているが，その一つは「傾聴」の技術（the art of listening）であり，もう一つは，社会を「観察する能力」（the capacity to observe）だと言う。ガーキンは，牧会においてキリスト教共同体を取り巻く文化的コンテクストに注目すべきだと主張し，牧会者は，牧会の対象となる人々を取り巻く社会環境を注視し，それを批判的に評価しなければならないと述べる[13]。そのために，20世紀の牧会学は，伝統的な神学の領域を超えて，心理学や宗教心理学，宗教社会学，宗教人類学など，関連する諸学問との対話を進めてきた[14]。

このことは，フェミニスト・アプローチをとる牧会学においても同様である。そして，その際，「傾聴」，すなわち女性たちの人生経験・日常生活の経験を，本人の視点と立場に立って丁寧に聞き取ることが何よりも大切にされる。フェミニスト・アプローチは，女性の目線に立って，その人の人生の「物語」に真摯に耳を傾けることから始まると言える。

(3) praxis（実践）と理論の統合

飯野は，「フェミニスト神学は，抑圧からの解放を願う全てのキリスト者女性によって担われる神学運動であり，また『実践と省察』の往復過程の中で絶えず新しくされていく動的な神学である」と述べる[15]。フェミニスト神学をはじめ解放の神学の流れを組む神学者たちは，神学理論や伝統的教義から始めるのではなく，現場の実践経験の上に立ち「実践経験から理論形成へ」向かうこと，また実践（praxis）と理論が統合されていることの重要性を強調する。

13　チャールズ・V・ガーキン『牧会学入門』越川弘英訳（日本キリスト教団出版局，2012 年）48，121-122 頁。

14　例えば，J. R. Burck & R. J. Hunter, “Pastoral Theology, Protestant,” in ed. R. J. Hunter *Dictionary of Pastoral Care and Counseling, Expanded Edition* (Nashville, TN: Abingdon Press, 2005), pp. 867-872.

15　飯野かおり「第五章　フェミニスト神学」神田健次・関田寛雄・森野善右衛門編『総説実践神学』（日本基督教団出版局，1989 年），354 頁。

例えば，西アフリカ，ガーナ出身の牧会学者ラーティは，解放の神学の立場から，牧会学の「実践（praxis）モデル」を提唱する。このモデルでは，牧会学は，理論と実践との批判的で創造的な対話の積み重ねによって発展する[16]。もっとも，このことは実践神学全体について言えることであり，すでに日本の実践神学者によっても言われてきたことである[17]。

(4) 牧会実践のコンテクスト，牧会者の個人史や社会的歴史的背景の検討

牧会学へのフェミニスト・アプローチの大きな特徴は，フェミニスト神学やフェミニスト・カウンセリングがそうであるように，その女性が置かれている社会的状況，すなわち女性が置かれた社会的・文化的コンテクストを評価し，検討することである[18]。危機にある人の反応も牧会者の対応も，その人の個人史はもちろん，ジェンダーや人種や社会階層や年齢などさまざまな要素によって複雑に構築される。それらの分析をすること，特に女性差別が起こってくる社会構造や歴史的背景，個人史，価値観などを検討することが重要だとされる[19]。

(5) 牧会者の自らへの問いかけ（省察）の重要性

以上のことから，牧会者自身も，自分が生きるコンテクストのなかでどのように自分の経験や考え方が形成されてきたかについて吟味しなければならないことになる[20]。牧会での人間関係には，牧会者の持つ「力（パワー）」が大きな影響を与えている。牧師が教会でもっている宗教的権威の影響力の大きさを考えるとき，牧会に携わる牧師は，宣教の現場において，牧師として，

16　E. Y. Lartey, *Pastoral Theology in an Intercultural World* (Cleveland, OH: Pilgrim Press, 2006), p. 24.

17　例えば，関田寛雄『「断片」の神学－実践神学の諸問題』（日本キリスト教団出版局，2005 年），32-34 頁。

18　牧会のコンテクストを検証することの重要性は，すでに色々なところで言われている。例えば，John Patton, *Pastoral Care in Context: An Introduction to Pastoral Care* (Louisville, KY: Westminster/John Knox Press, 1993).

19　Carrie Doehring, *The Practice of Pastoral Care: A Postmodern Approach*, revised and expanded edition, (Louisville, KY: Westminster John Knox Press, 2006), p. 97.

20　Carrie Doehring, p. 6.

たとえ善意であったとしても，上下関係や自分の「立場」が微妙に自分の牧会に影響を与えることを考慮する必要がある。牧会学者ジョン・パットンは，ハラスメントを防ぐには，自分が無意識のうちに行使している力とその背景にある文化のダイナミクスへの洞察を深めることが不可欠であることを強調した[21]。

牧会が提供される背景や環境，とくにジェンダーや人種差別の問題，牧会者と支援される人との間のパワー・ダイナミクス（人間関係の力学）を注意深く吟味することなしには，牧会者は相手の置かれている状況を本当には理解できないばかりか，反対に，無自覚のうちに相手を傷つける可能性がある。これが教会内でのハラスメントの背景にある事柄ではないだろうか。

牧会者として，自分はどのような価値観や偏見を持っているだろうか？自分は，どのような民族的背景・社会階層・経済的レベル・教育レベル・信仰・家族のもとで育ってきて，これらの観点からみた場合，今現在，どのような立場にあるだろうか？自分が生きている社会の文化的コンテクストや社会構造は，どのように自分のものの見方や考え方を作り上げているだろうか？社会の中で自分が置かれている位置は，自分の牧会や相手との人間関係にどのような影響を与えているだろうか？牧会者には，以上を吟味することが要求される[22]。牧会者は，牧師として自分が有している社会的特権を自覚し，自らのものの見方の前提を意識化した上で他者の世界観・価値観と出会ってゆこうとする，真摯な自己省察の作業が必要だとダーリングは語る[23]。

(6) 自分の「声」や「物語」を発見し，新たな信仰共同体を創るための支援

ジェンダー研究とフェミニスト神学の成果を継承してパストラル・カウンセリングのフェミニスト・パラダイムに立つモデルを構築した女性牧会学者の一人に，C. ニューガー（C. Neuger）が挙げられる。ニューガーは，社会正

21　John Patton, *Pastoral Care in Context: An Introduction to Pastoral Care* (Louisville, KY: Westminster/John Knox Press, 1993), pp. 216-219.

22　John Patton, pp. 216-219.

23　Doehring, pp. 167-168.

義の問題とキリスト教の信仰を統合しようとするパストラル・カウンセリングのモデルを示した。彼女は，*Counseling Women: A Narrative, Pastoral Approach*（2001年）の中で，家庭内暴力やうつ病，エイジングなど，女性が一生を通して経験するさまざまなトピックを取り上げ，性差別が個人や社会にどのような影響力を及ぼすかについて論じている。

ニューガーのパストラル・カウンセリング理論は，マイケル・ホワイト等のナラティブ・セラピー[24]の立場に依っている。ナラティブ・セラピーとは，現実は社会的に構成されるとする社会構成主義の立場に基づく心理療法の一つである。ナラティブ・セラピーでは，悩みを持つ人々の現実はその人や家族や文化が持つ物語によって形成されていると考え，カウンセラーは，人々が出来事に対する新しい解釈やものの見方をすることによって，彼らが新しく建設的な物語と現実を再構築してゆけるように援助する。カウンセラーとクライエントが協同して「新しい物語」「いまだ語られていない物語」を構築するのである。

ニューガーは，その際，ジェンダーの要素がどのようにその人のものの見方や考え方を形成してきたかに注目すべきだとする。ニューガーは，社会の中で疎外され，セルフイメージの低さに悩み，自らの声を失っている人々が，自分の本当の「声」を発見し，自分の考えを明確化し，仲間とともに新たに生き生きとした人生を作り上げてゆくことができる信仰共同体を創る支援をするのが，パストラル・カウンセリングの目的だと考える[25]。

信仰とともに歩む生においては，神への信頼に基づいて，この世界に自分の居場所があるという確信と神への信頼を持つことが，人生における新たな可能性を生みだす原動力となる。疎外され，孤立し，痛みと困難の中でありのままの自分を受け入れることを否定されてきた女性たちに対して，

24　エプストン，デービッド，マイケル・ホワイト「第五章　書きかえ療法－人生というストーリーの再著述」S・マクナミー，K. J. ガーゲン編（野村裕二・野村直樹訳）『ナラティブ・セラピー－社会構成主義の実践』復刻版（遠見書房，2014 年）103-137 頁

25　Christie Cozad Neuger, *Counseling Women: A Narrative, Pastoral Approach*. (Minneapolis, MN: Augsburg Fortress Press, 2001), p. 29.

ニューガーは，自己の回復と主体性の回復を目指すようにと訴える。ニューガーによれば，このプロセスにおいては，聖書の中の解放と救いの物語，正義の実現を目指す預言者的な声，キリストの体である信仰共同体の力というキリスト教のメッセージこそが，厳しい現実と闘うための希望を呼び起こす力の源となる[26]。そして，牧会者は，そのような女性たちに対して神の無条件のめぐみを伝え，彼女たちのさまざまな可能性を回復し，キリストの体である教会の再生をもたらすために支え導く責任があるとされている[27]。

終わりに

以上，北米における牧会学へのフェミニスト・アプローチの主に初期の著作のいくつかを紹介した。Ⅰ.でも述べたように，近年の北米フェミニスト神学では，当事者たちの背景や置かれている状況によってさまざまな立場からの主張がなされている。それらに共通しているのは，従来私たちは，人種，階級，文化，民族，性的指向などの社会的要因やジェンダーと権力との関係を十分に考察してきただろうかという問いかけである。その意味で，牧会学へのフェミニスト・アプローチは，性差別だけではなく，社会階層，人種，民族，性的指向などすべての観点から見て，社会から疎外され，痛みを負い，沈黙させられてきた人々が声を上げ，教会の中にあって共に手を携えて問題を乗り越えてゆくことを最終目的とすると言うべきだろう。

最後に，教会でのハラスメントを防止するために，このアプローチから学べることは何だろうか。私が学んだことは，牧会者は，自らの聖書解釈や信仰のあり方を日々吟味することはもちろんだが，加えて，牧会実践の社会的コンテクストや牧会における人間関係の中に存在する複雑な力の構造を自覚し，絶えず自らの牧会実践が適切かどうかを検討する必要があるということである。また，自らの神学や信仰のあり方は，相手の話を聞き，援助をしようとするときの牧会者としての自分の態度や解釈に強い影響力を与えること

26　Ibid., p. 239.
27　Ibid., pp. 57-61.

から，自分の牧会を支える神学と自らの信仰のあり方を祈りとともに謙虚に吟味し，それらがどのように形成されてきたかを自覚することである。今回フェミニスト牧会学の成果を学びながら，筆者は，牧会学の古典『牧会学Ⅰ－慰めの対話』において，E.トウルナイゼンが「断絶線」という言葉を用いながら強調したこと，すなわち，神の判断の前に，人間の判断には限界があることを徹底的に認識すべきだという主張[28]の意味について，改めて考えさせられた。

無論，これらを日々実行することは誰にとっても容易なことではない。また一人だけでできることでもない。今後は，日本の教会の中でこれらをどう具体的に根付かせ，発展させてゆくかがさらなる課題となるであろう。

参考文献

Burck, J. R., & Hunter, R. J. 2005. “Pastoral Theology, Protestant.” In *Dictionary of Pastoral Care and Counseling, Expanded Edition.* Edited by R. J. Hunter, 867-872. Nashville, TN: Abingdon Press.

Demarinis, Valerie M. 1993. *Critical Caring: A Feminist Model for Pastoral Psychology*. Louisville, KY: Westminster/John Knox Press.

Doehring, Carrie. 2006. *The Practice of Pastoral Care: A Postmodern Approach*. Louisville, KY: Westminster/John Knox Press.

エブストン，デービッド，マイケル・ホワイト「第五章　書きかえ療法－人生というストーリーの再著述」S・マクナミー，K. J. ガーゲン編『ナラティブ・セラピー－社会構成主義の実践』復刻版，野村裕二・野村直樹訳，遠見書房　2014年　103-137頁

ガーキン，チャールズ・V『牧会学入門』越川弘英訳　日本キリスト教団出版局　2012年

Glaz, Maxine, and Jeanne Stevenson Moessner. 1991. *Women in Travail and Transition: A New Pastoral Care*. Minneapolis, MN: Augsburg Fortress.

ハラスメント防止テキスト作成プロジェクトチーム編『ハラスメント防止テキスト教会と暴力Ⅰ・Ⅱ』日本バプテスト連盟宣教研究所・日本バプテスト女性連合，2011年

飯野かおり「第五章　フェミニスト神学」神田健次・関田寛雄・森野善右衛門編『総説実践神学』日本基督教団出版局　1989年　344-361頁

28　E.トウルナイゼン『牧会学Ⅰ－慰めの対話』加藤常昭訳（日本基督教団出版局，1961年）161頁以下。

Lartey, E. Y. 2006. *Pastoral Theology in an Intercultural World*. Cleveland, OH: Pilgrim Press.

Miller-McLemore, Bonnie J. & Brita Gill-Austern (Eds.). 1999. *Feminist & Womanist Pastoral Theology*. Nashville, TN: Abingdon Press.

Neuger, Cozad Christie. 2001. *Counseling Women: A Narrative, Pastoral Approach*. Minneapolis: MN, Augsburg Fortress Press.

Patton, John. 1993. *Pastoral Care in Context: An Introduction to Pastoral Care*. Louisville, KY: Westminster/John Knox Press.

関田寛雄『「断片」の神学 ― 実践神学の諸問題』日本キリスト教団出版局　2005年

Tanaka T., Okamoto S. Increase in Suicide Following an Initial Decline During the COVID-19 Pandemic in Japan. *Nature Human Behaviour*. (2021). https://www.nature.com/articles/s41562-020-01042-z.

トウルナイゼン，E.『牧会学Ⅰ－慰めの対話』加藤常昭訳　日本基督教団出版局　1961年

ウォーカー，アリス『母の庭をさがして』（アメリカ・コラムニスト全集－アリス・ウォーカー集）原このみ訳　東京書籍　1992年